

ガラス工芸にメッキを取り入れた新しい制作手法を、富山ガラス工房（富山市古沢、野田雄一館長）と工業用メッキを手掛ける「ユニゾーン」（同市綾田町、梅田ひろ美社長）が共同で開発した。第1弾の作品として、ニッケルメッキを施したガラスのオ

ブジェがこのほど完成した。ガラスの透明感と、金属特有の質感や光沢を併せ持っているのが特徴で、他の金属によるメッキも試し、新しい表現の可能性を探る考えだ。

（報道センター・五艘和宏）

# ガラスとメッキコラボ

## 透明感・光沢が魅力



表面にメッキを施したガラスオブジェを手にする梅田社長（左）と野田館長＝富山市綾田町のユニゾーン

### 富山ガラス工房とユニゾーン開発

工業製品だけでなくさまざまな、ニッケルで覆われている。底面積広い分野でメッキ技術を取り入れてもらうと、ユニゾーンが富山ガラス工房に対し、メッキを用いた作品の制作を提案した。富山ガラス工房も、富山オリジナルのガラス工芸を模索していたことから、共同研究に取り組むことが決まった。

ユニゾーンは試行錯誤しながら、ニッケルとガラスとの密着性を高めるメッキ液を開発した。メッキを施した金属は加熱炉で乾燥させるが、ガラスは熱を加えすぎると割れてしまったため、実験を重ねることでガラスが破損しない適正温度を探り当てた。

完成したオブジェは高さ約5センチ、幅約10センチ、重さ約300グラム。空豆をほつくとさせる形状で、表面はつやのある銀色の状態だ。

野田館長はメッキによってガラスの透明感が引き立つことが分かった。この手法を駆使し、ガラス工芸の可能性を広げたい」と力を込める。梅田社長は「これまで培ったノウハウを、富山のガラス文化の振興に役立ててもらえればうれしい。共同制作の第1弾となったオブジェは、会社創立55周年の記念品として社員らに贈呈したい」と話している。

既にニッケルのほか、金や銅などによるメッキも試しており、ガラスだけでは表現できない作品の創造につなげるほか、照明器具などへの応用も視野に入れている。